

留学生通信

チュニジア人から見た日本の研究生生活

Research Life in Japan Seen from a Tunisian Eye



クリストウ マハリズ

Kristou Mehrez

■2006年チュニジア・応用科学技術総合大学ソフトウェアソフトウェア工学卒業、2007年筑波大学大学院システム情報工学研究科コンピュータサイエンス専攻博士前期課程入学、2009年筑波大学大学院システム情報工学研究科コンピュータサイエンス専攻博士前期課程修了、2009年筑波大学大学院システム情報工学研究科コンピュータサイエンス専攻博士後期課程入学

■主として行っている研究

・自立運搬カートのための混雑した環境での人間識別と人間追跡

■通学先

筑波大学大学院システム情報工学研究科コンピュータサイエンス専攻博士後期課程2年

(〒305-0006 茨城県つくば市天王台2-1-1の矢学生宿舎17棟202号室)

E-mail: anjin@roboken.cs.tsukuba.ac.jp

1 はじめに

私は、地中海にあるチュニジアという景色のよい国から来た。歴史深い土地である。今のチュニジアがある場所は、古くはフェニキア人の拠点カルタゴが、そしてビザンチン帝国が領土を最大に広げたユスティニアヌス帝の時代には、その一領土だった。7世紀から、アラブ人が侵入し、チュニジアはイスラム圏となった。その後、フランスの侵攻により、1881年にフランスの保護領にされた。1956年に、今のチュニジア共和国が成立した。

現在のチュニジアでは、科学や技術に多くの注目が集まっている。最新テクノロジーも溢れていて、それらを見たり学んだりする機会も多くある。私は、幼いころからコンピュータやソフトウェア開発に強い興味があり、中学校の時に初めてパソコンを手に入れた。いつも新しいものが欲しくて、父にねだったり、そのために、アルバイトもした。初めて自分でソフトを開発したのは16歳のとき、仏英辞書だった。卒業したのは、チュニスにある国立応用科学技術大学(INSAT)である。工学やソフトウェア開発等、いろいろな科目とコースを勉強した。

2 日本文化に触発されて

日本と初めて出会ったのは、筑波大学とINSATが共催した学会にあわせて催された『チュニジア-日本文化週間』という祭りだった。「日本の世界遺産ジオリマ」「ポスター」「日本映画」の展示・上映のほか、空手、生け花、書道、折り紙の実演など盛りだくさんだった。このときに日本に興味を持ち、日本語の勉強を始めた。日本大使館に文部科学省の奨学金を応募するチャンスがあると大学の先生が教えてくれた。私はソフトウェアの開発が好きで、もっと深く勉強したいと考えていた。ロボット用ソフトウェアの開発は、よい挑戦になると思い、ロボットの研究

室を探して、今の筑波大学知能ロボット研究室に受け入れてもらった。

3 研究室の協力関係に感動

日本に来てから、私の生活や考え方は大きく変わった。まず、日本の大学がチュニジアと違う点は、学生一人一人に指導教員がつく点である。チュニジアでは、クラス全員が授業に出て試験を受け、評価をもらう。個人の研究はあまりしない。卒業論文を書くため、もちろん自分の研究を行うが、指導教員の役割は研究指導ではなく、論文を直すことだ。今、私の所属する研究室では、メンバー相互の強い協力関係がある。自分一人で研究と戦うのではなく、先輩に質問すれば、いつでも助けてもらえる。そのことに、とても感動した。機械の使い方など多くの知識やノウハウが、文書だけではなく、口頭で伝えられることを知った。

指導教員との研究打ち合わせは、毎週定期的に行われる。これが非常に有効だと感じている。一週間という期間は、与えられた課題に対して結果を出すのに適当だし、研究中に問題が起きて解決が必要な場合、手遅れにもならない。先生と、さらに相談が必要な場合は、いつでも対応してもらえる。先生の応援は、研究を進めるにあたり、大きな動機づけとなる。

せっかく、日本に来てても、英語だけを使っている外国人留学生が少なくない。指導教員と英語で議論すれば、それで十分との考え方は、正しくないと思う。日本で生活するには、どうしても日本語が必要になる。大学でも、他の人とのコミュニケーションは、研究を進めるツールの一部だ。先生や他の学生が話していることがわかれば、自分がやっていることにも、大いに役立つ。会話ができれば、自分の研究について相談もできる。多くの情報を交換するために、できるだけ日本語で会話をするのが、よい結果を得る、知識を深めるためには重要である。

研究室では、毎週1回全体ミーティ



図1 チュニジアの場所



図2 首都チュニスの北東約20kmにある観光地シディ・ブ・サイド

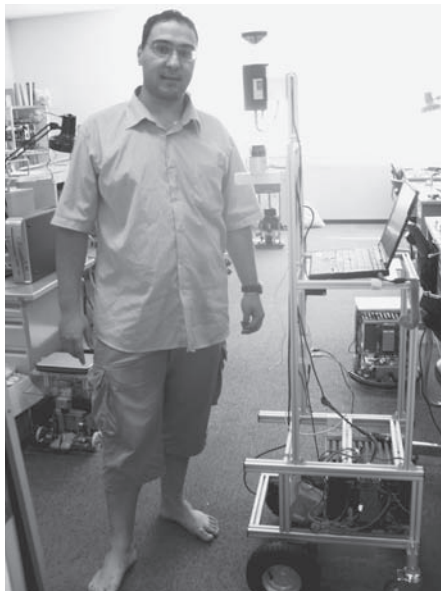


図3 私が研究している移動ロボットと私



図4 そうめん流しパーティ

ングがあり、その後、全員で研究室内の掃除を行うが、これも驚いたことの一つだ。なぜなら、先輩後輩関係なく、皆ががんばって働くからである。この作業は、メンバーに一体感を持たせる効果が大いと思う。また、毎年4月に行う研究室の模様替えでは、大掃除と物品整理、席替えなどが行われる。配置が新しくなることで、自分も新しい気持ちになり、やる気が湧いてくる。自分で研究室の準備を手伝うと、まるで自分で作ったワークスペースのようで、がんばろうという思いとともに、新しい挑戦をしたくなる。必要なものは、すべて研究室にある。アイデアや知識を持ち、努力さえすれば、資料は

必要に応じて手に入れられる。これは、研究者にとって理想的な環境ではないだろうか。

最後に、驚いたのは研究室のどんなイベントにも「担当者」がいることである。スケジュール調整の準備であれ、見学来訪の対応であれ、いつも責任者がいる。些細な仕事にも、担当者がいるのが不思議だった。研究室の皆に、社会的な役割を担わせるのは、責任感を育てるためによいことだと思う。

4 おわりに

研究室では、皆でいろいろな行事を企画する。たとえば、飲み会やパーティ

などだ。先生が招待してくれたそうめん流しパーティは、とても日本らしいものだった。竹を切ったり、みんなと一緒にそうめんを食べたりするのはとても楽しかった。毎年3回行われる研究室の発表会は、3回とも違う場所で行われている。勉強とともに観光するのが、私にとっては楽しいことだ。そして、この発表会に参加するのが、いつも新しい結果を出す一つの動機となっている。

これからもよい研究結果を出すために頑張っていく。博士課程を修了後は、学んだものを活かした仕事に就きたいと思っている。